

### 佐川フォト5人展

〜篠原真弥さん〜



作品の前で 篠原真弥さん

取材 編集部 大川法由記

佐川町牧野公園は桜が満開を迎え、花びらがひらひらと帽子や肩や足元に舞い落ちてきます。その牧野公園の入り口、旧浜口邸の向かいに、復元された名教館（めいこうかん）があります。名教館は佐川領主、深尾氏が家塾として創設、のちに郷校となり牧野富太郎も学んだ学校として知られています。その名教館を会場に篠原真弥さんが出展している「佐川フォト5人展」が3月27日から4月3日まで開かれました。

「最初のころはキタムラカメラのフォトコンテストに出したけど通らんのよねえ。そのうち一次通過したり二次通過したり佳作になったり。その繰り返しの中でちよっとずつわかって始めたのかなあ。フォトコンテストの雑誌をとりよつたからそれを見て読んで勉強していった」

#### 「入賞後」

「『カメラのキタムラフォトコンテスト』と日本写真企業の『フォトコン』でそれぞれ特選。県展では入選以外に褒状1回、特選2回。二科展では7回出品して5回入選です。二科展に入選5回はすごいですね」と言う私に「ただの入選だから」と篠原さん。「ただの入選」は謙遜でなく高い目標があるからでしょう。

英語教員で会話に不自由しないこともあり、国外の撮影ツアーに出掛け、国内、県内そして早朝も夜もエネルギーに撮影に向かっています。好きなことに没入し、写真の世界のその奥深さにどっぷりはまる、それが生きがいとなり自身の体現になる。生き生きと打ち込む篠原さんがまぶしく感じられました。

## 第93回メーデー 高知県中央集会 2022年5月1日



「佐川フォト5人展」は佐川在住の5人による写真展で、毎年開催、今年で第14回を数え、篠原さんは第10回から参加しています。名教館の畳の上に立てられたパネルに5人の作品が、それぞれのテーマで展示されています。篠原さんのテーマは「潮騒」で、他の4人は「私の仁淀ブルー」「和やかな時間」「小さな生命」「風景と時々ネコ」。それぞれ思い思いに自由な楽しさが感じられる作品展でした。



作品① 真珠（パール）の渚

「カニさんは離れた場所にいるのですがこちらに移動してもらいました」と篠原さん。どのようにしてこの美しい真珠を表現できたのでしょうか。撮影は砂浜に腹ばいになってローアングルから、カニのいる玉砂利にピントを合わせ、絞りをいっばいに開放して撮影します。するとカニのいる前後の濡れた玉砂利が真珠のようにきらきら光る丸い粒になって（玉ボケというらしい）



作品② 夕空を飛んで

「夕空を飛んで」（写真②）は、切れ目のある堤防で、堤防から堤防に跳び移っている3匹のネコの作品。1匹は跳び移って着地した直後、2匹目は跳び上がった瞬間、3匹目は跳び移ろうと構えている途中。「よくこんなタイミングをとらえたね」と驚く私に、「魔法を仕掛けたら跳んでくれました」。どんな魔法か教えてもらいました。一瞬のシャッターチャンスは口を開けて待っていても得られない、「知恵と工夫と忍耐」であると感じてきました。撮影の話になると篠原さんの写真への愛と情熱があふれるようにほとほとしゃべります。

#### 「写真に打ち込むきっかけ」

「小学生の時から、父が新しいカメラを買って古いのを私にくれたのよ。フィルムを入れてくれず、フィルムが入っていないそのカメラで子どもの私は腹ばいになって写す格好をしたりして、カメラ

で遊んでいました。おもちゃ箱に入れていましたよ。中学生の時、修学旅行に簡単に写せるカメラを持って行って友達や景色を写し、初めての一眼レフは父に貸してもらったもので、友だちの結婚披露宴を撮ってとても楽しかった。三十代で子育てと仕事で、それまで描いていた油絵ができなくなってカメラに代わりました」

#### 「コンテストに出る」始めの頃

「写真は生きがいになったというか、趣味がそのまま没入してしまったというか、楽しいから！という風になるかいろいろ考えて撮るのが楽しいから」

「写真部の顧問をしていた時に全国高等学校総合文化祭に生徒が三年連続で出展できて、職朝で報告したあと校長室で校長から『顧問のあなたも作品を出さないか』と言われ、それで初めて県展に出したら入選して。ただの入選だけど、その後褒状を取ったときはうれしかった」

(左上へ)